

## 本庁舎の建て替えに関する市民からのご意見

## 参考 1-1 仙台ラウンドテーブルにおけるご意見（抜粋）

平成 31 年 4 月 23 日に開催した第 3 回仙台ラウンドテーブル「地域コアとなる市役所(シティホール)を育む」に寄せられたご意見のうち、本庁舎建替事業に関するものは下記のとおり。

## テーブルA 「都市ビジョン」の一翼を担う市役所本庁舎とは何かを考える。

## A-1 中心部他施設とのネットワークから「市役所(シティホール)」が担う役割を考える。

- 中心部メモリアル施設は、荒井のせんだい 3.11 メモリアル交流館よりも震災を俯瞰的に見るような視点の拠点となると思う。災害と共に生きる「災害文化」を都市のアイデンティティとして持つべきだと思う。市庁舎もそういう側面を持ってほしいはず。
- 仙台市役所の 1 階はある意味で、みんなの広場であり、仙台や東北すべてにつながる場所であって欲しい。そういう情報発信をする場であるべきだと思う。そして、仙台の中心が、仙台の歴史やまちづくり、東北全域へとつながってゆくようになると良いと思う。
- 市役所にとって、広場の在り方が重要だと思う。それと同時にやはり、民主主義の社会の中では、議場が重要だと思う。社会の決定に対しての仕組みが市民に可視化されることは重要だと思う。
- 施設のネットワークではなく、「個人が歩いてゆく（トリップ）中で紡いでゆく経路」という視線でまちなかを再編集した方が良いと思う。
- 公共がつくって公共が管理する公共施設でなく、新しい公共性が重要だと思う。パブリックとプライベートの間になることが露出することでまちが面白くなる。
- ラウンドテーブルで皆さんの意見を聞くと、みんなが「みんなの場所」「みんなのひろば」という認識の場所が多いことに気づかされる。それが仙台の特色ではないかと思う。JAZZ フェスの際の定禅寺通が象徴的かもしれないが、（所有権とは別の）そうした曖昧な場所が連続してゆくことが仙台らしさを生んでいるのかもしれないと思う。それをだれもが「私の場所」と感じるのが重要だと思う。それが本当の意味での公共性だと思う。
- 震災の記憶をどう活かすかについては、「災害の記憶」については、沿岸部のメモリアル施設が担えばよいと思うが、市役所本庁舎で担うべき震災復興は、「大災害を乗り越えその教訓を活かした社会とはどういったものなのか」という問いへの答えだと思う。
- 「市民協働のプラットフォーム」が重要だと思う。お金を掛けるハード的なことよりも、「プロ的なノウハウを持った人たちが集まって社会運営を考える」ようなソフト的なことの方が重要だと思う。ソフト力で結構何でもできるのだと思う。
- 様々なことを「可視化する」事の本当の意味は、わざわざ足を運ばなければならない理由を考える、ということ。ネットで見て満足するのではなく、足を運ぶ理由をつくるべき。
- 仙台は自信喪失しており、自分たちのまちを自慢げに話すことが出来ないのだと思う。

## A-2 周辺エリアのビジョンの一翼を担う「市役所(シティホール)」を考える。

- 仙台は、通り過ぎてしまう町だと思う。目的が無いと来ないし、仙台ならではの風景や場所が無いと思う。また、様々な活動をしている人たちがいるが、それが連携できていないと思う。震災を乗り越えた都市として、そういう様々な人がつながってゆく社会をどうつくってゆかが問われていると思う。
- 市民との関わり、立地、規模など、さまざまな面から考えて、市役所本庁舎ほどまちづくりに影響力のある建物はない。
- プロセスのデザインが重要だと思う。「決めたことは変えられない」のではなく、必要なことを柔軟に取り入れてゆくことが重要だと思う。
- 杜の都は、仙台市と市民が築き上げてきた市民協働の象徴だと思う。ある時点までは日本のトップランナーだったが、現在では、そうではない。海外を含め、様々な都市が積極的な取り組みをする中で仙台は大きく遅れてしまったと思う。現在ある緑の資源を活かしながら更に強化することを考えるべきだと思う。現状維持では他都市から遅れてしまう。
- この市庁舎建て替えプロジェクトは、広場との関係やまちづくりの中での位置付け、という意味も大きいですが、やはり市役所本庁舎でしか果たせない役割があり、その「社会の未来について市民が話し合い議論する機能」が最も重要だと思う。それに向き合った施設づくりに取り組むべきであり、このラウンドテーブルのような場が新しい庁舎には必要だと思う。
- 市民が都市ビジョンを共有し、新しいビジョンを形成するためには、（シンガポールのシティギャラリーのような）都市が可視化される施設などが重要だと思う。
- 日本中の都市で、公共空間をどうつくるかでうまくいっていない。それを仙台が公民連携・市民協働で乗り越えることが出来たら、素晴らしい事例となる。
- 仙台は市民協働が誇りだと言いながら、最近かなり停滞しているという印象がある。
- 定禅寺通りの緑が素晴らしいのは、利活用と一体となっていることにも大きな理由があると思う。ただの緑地だけでは今の魅力は出ないと思う。
- これまでは、地下鉄やバスなどの交通計画と建物は別々に考えるのが通例だったが、それらを同時に考えることが重要。
- 地理の授業が今後変わるらしい。自然地理でなく、未来を考える地理、いわば都市計画に近い地理に代わってゆらしい。それくらい様々なことが変わっている。
- 世界的に見ると、この市庁舎は「東日本大震災の総仕上げ」という見られ方をするはず。「どういう未来の社会になるか」について、私たちは世界に答えなければならないと思う。

## 本庁舎の建て替えに関する市民からのご意見

### テーブル B 「これからの仙台を担う仕組み」を考える。

#### B-1 市民協働・これからの仙台を担う仕組みから「市役所(シティホール)」を考える。

##### 論点 1 これからの市民協働や公共の在り方

- 声のあげにくい市民・参加する時間がとりにくい市民・参加するコストをクリアできる環境を準備し、行政、議員、市民が寛容な精神で情報を共有できる場を作る。
- 制度上の協働を進めることが縦割り行政において非常に難しい。制度を超え、部局を超え重なり合いながら横断的にサポートする行政と市民の柔軟性や双方向の対応や予算付けが求められる。
- キーパーソンとの出会いを意図的に作る。
- 意図をもってセクターを超える。資源が流出していることを認識しないとイケない。
- 企業は社会の公器である。市民協働に企業も関わっていることをアピールするとともに自らも参加している自覚を持つことが求められる。
- 市民が仙台の未来を創造できる共通のビジョンがあれば共感が示されれば、わかりやすいのでは。共創（コークリエーション）。
- 仙台市の市民協働は1967年に起源を持つ政治文化であり、全国的に見ても先進的で特異な関係にある。今後はあらゆる政策と一緒に（議会、市民、行政）に効率的に作っていくということが重要。

##### 論点 2 市民が主役の街づくりが実現するような場

- 蓄積としての定量的なデータとわかりやすい簡素化してデータを取得できる場
- 場でイノベーションを起す。節約効果、相乗効果、育成効果が見込め、取引コスト（調整にかかる費用）を下げるのが重要である。よって、フレキシブルに対応できる空間構成。マグネットや画びょうが使える掲示板。
- 多種多様な資源と情報がある中で整理していくことが必要。プログラムと人がセットとなり異なるセクターをつなぐ翻訳者が求められる。今回の低層部の整理に合わせて、コミュニティセンターやサポートセンター、区役所、本庁舎に必要とされる機能の集約や分散なども、併せて検討すべき。
- 小中学校子供たちが活動できる空間。教員たちの負担軽減にも効果あり。
- 市民広場を芝生にして一体的に利用できる空間としてほしい。
- 定禅寺通り界隈を含め、平日と休日の公私トラストに対応できる空間づくり。
- 子供たちが市役所に訪れる機会づくり、将来の担い手育成。
- コンシェルジェ。ワンストップ窓口。NPO 留学。若手起業家のチャレンジの場、発信の場。常設の障害者雇用の働き空間。

##### 論点 3 具体的な機能や運営

- セクターを超えイノベーションが進み、政策立案をする場所 協働政策リノベーションセンター
- メディアテークの発展形、議会は、ガラス張 段差なし
- 開放的な本会議場の横で、ママ友が子育て支援のサークルをやり、その横で NPO がホームレス対策の炊き出しをやるような一体的な空間
- 正面玄関に車が寄り付かない計画。商店街との関係性や排ガスなどに伴う環境負荷に配慮し、市民広場を芝生にしてそこを歩いて正面玄関にアプローチ
- 開放的な内部空間と連続するバルコニー。50人くらいが集まってディスカッションできる場。
- 最上階の大会議室を低層階に設けてほしい。
- 課題や情報などがオープンに持ち込まれる目安箱委員会。
- 市だけで運営管理を決めないでほしい。プロのコーディネーターがそこにいること。

#### B-2 低層部の必要機能と運営手法を考える。

##### 論点 1 シティホールとしての機能面から考える

- グリーンループ 回遊性を高める。
- 移動手段の一つとしてタウンモビリティのようなステーション機能を持たせては。新市役所から人が放射状に自由に動ける基点を作る。障害者の方も一緒に市民活動・イベントを楽しめる仕組み。
- 目的を持たない、フリースペースがあると、車いす利用者が多人数で訪れても、待ち合わせや打合せなど活用できる。
- 市民が市の課題や市を発展させていくために、市と行政と一緒に話合いができる場所に。
- 市役所はオフィスではあるが、土日に関わってほしい。
- 市民協働 低層部である必要はないのでは？ 中間部にあっても良いのでは。
- 市役所を作るついでに作るのでは駄目である。真剣に考える
- 市役所がここにある理由、仕事は何のためにやっているのかなど、ここでやっていることがわかる、見えるような機能。

##### 論点 2 賑わい創出という視点で考える

- 収益を得て低層部の運営を行うことを考える。
- 市民協働ではなく行政が民間の活動に協働する。「行政協働」
- 仙台資本がもう少し稼げるように誘導するような市役所づくり、賑わいづくりが必要。
- 仙台のこれからのまちづくりのプロジェクトが分かるものが置いてあり、そのための手伝いや問題解決の為に集まる賑わいもあるのでは。市役所という機能にかけ算して人が来る理由を作れるのかを考える。
- 動的なイベントは屋外で行い、静的な意味での人が集まる空間を低層階に準備する。
- この地区 エリアとしての ハブ 仙台が東北のハブである。
- 能動性の観点からは、勾当台エリアは、交通結節点としては仙台駅には適わない。ダイナミックな発想の転換も必要では。
- 回遊性の西公園に何かコンテンツはあるのか 魅力がない。市役所が回遊の拠点とするならば、西側に何か大きいものがほしい。もっと観光の目玉を考えなければ、賑わい創出にならない。

##### 論点 3 運営手法を考える

- このエリアは何が不足して何を置きたいのか、マーケットの価値があるのかなのか、価値としては何があるのか、課題は何なのかを見極めることが必要。
- 地元資本が動ける環境が必要。
- 民間サービスとして稼いでいくことが必要 「稼ぐ」とはお金もだが、人・コンテンツも稼ぐことで経済の活性化が図られる。
- 民間が自由に出来る環境を整備する必要がある。
- 低層部のマネージメントを高いオリティと 人材 対価を払ってやるべきだ
- 低層部にカフェを入れるとき 行政や利用者数に頼るのではなく、お店が入ったときに廻りの環境にとってどれだけメリットがあるのかが大切ではないか。
- 運営には運営のプロがいてノウハウや経験が必要である。プロを育てる 使う人と一緒になって考える。
- 市役所に賑わいをもってくるためには民に任せる覚悟を持たなければいけない。

## 本庁舎の建て替えに関する市民からのご意見

## テーブルC 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する。

## C-1 基本計画検討委員会資料レビューする。

- 1 棟案の場合の建物の高さが、どの程度高くなるかが気になる。また、低層部の使い方が重要になるので、市民利用など具体的な事を含めて可能性を探りたい。
- 建物高さについては、歩いている人の目線からは、13F も 19F も変わらない。建物の透過性や広場の作り方など、目線レベルを考えてほしい。敷地と市民広場を一体で考えた方が良く、一番町からの軸も現状は建物の中央にあることも、考慮したい。
- 資料に書かれている絵では、ハコ（建物）が壁にみえているのではと思う。断面構成の検討から見えてくるインターフェイスがあるのではないかと。通り抜け、壁がない空間、Opened な場所、使う人に委ねられた空間が必要で、「検討委員会で決めない」という決定が必要だ。
- 敷地周辺だけでなく、エリアまで考えて配置の検討をしてほしい。管理部門が異なる敷地が含まれているが、それらの境界を曖昧にしてほしい。北側の駐車場が敷地の裏を作っているが、市でも公共交通の利用促進をうたっており、駐車場は 150 台必要なのではないか。10 年先を見越した計画してほしい。
- 決める必要のないものは決めない勇気が必要ではないか。多様性のあるスペースが必要で、使い方の見極めが重要。決めずに場所の持つ意味を問い続けるプロセスプランニングが重要。新庁舎は定禅寺通り全体の地域マネジメントに組み込み、駅前と定禅寺通りを 2 つの拠点とするのが良いのではないかと。
- 設計者に全てを委ねるのではなく、発注側に、開かれた所と閉じられた所、決めるところと決めないところを決める、「発注する技術」が必要。発注側に専門家が必要ではないか。
- 余条件を超えた解決策まで決めない方が良いのではないかと。資料では規模は出しやすいがまちづくりの視点は余条件として出しづらい。公共建築の立ち方の方向性を議論したい。
- 委員会での検討結果は必要条件として出すものと参考資料として出すものを検討してほしい。設計者の選び方について、会社の規模や実績で選ぶのではなく、創造性と技術力両方を評価してほしい。設計者選定から施工契約まで時間をかけたい。イギリスの事例では 4 年かけており、設計者と市民が共に考える時間をとり、施工調整を丁寧に進めている。smt という前例で培った経験も生かしてほしい。
- 資料の棟内配置の図は市庁舎の典型であり、断面構成が決まっているかのような誤解を招く。今後関係図も変わっていき、ボリュームも FIX できないのではないかと。お互いわかりやすくするために、表現方法をどうするか知恵を出し合うべき。
- 市民と議会は近いものであるべき（位置という意味ではなく）。行政に入り込む市民活動もあるのではないかと。委員会では機能の関係性を決めて、棟内配置は設計者に任せるのがよい。

## C-2 勾当台エリア・新本庁舎を環境の視点から考える。

- （第 4 回委員会資料 5・6 について）一見すると要素技術のカタログのような表現になっており、仙台らしさを盛り込んだコンセプトが不十分。パッシブを矮小化しているようにも見える。要素技術をもれなく入れることは、一見すると良いことのようにだが、設計の足かせになるだけでなく、却って Flow Tooth な（歯の浮くような）建築になる危険性もある。基本計画では、まずは、具体的なコンセプトが必要。
- 要素技術（ハード）だけでなく、人間がどう暮らすか（ソフト）を考える。ソフトとして、子どもへの教育が必要。環境学習と防災学習のための場所として市庁舎とその周辺を計画する。設備・構造のスペックを見せるだけでなく、ZEB や太陽光発電、ゴミの循環や雨水利用、その土地で調達できる材料を使って仕上げるなど、学びの場所となる、技術と暮らしの橋渡しをする市庁舎とする。
- 市庁舎の環境性能を良くするだけでは、市民生活に何ら影響がない。市役所がお手本となり、街全体の雰囲気として良い環境を指向していると感じられるようにつくるべき。街並や都市に対して環境的テーマは何かを考える。新しい杜の都のイメージをつくるべく、街並を良くするためのリーダーシップをとれるように、市庁舎とその周辺をつくり込むべき。
- 仙台のアイデンティティとして、四ツ谷用水と屋敷林を考えてはどうか。四ツ谷用水は、生活用水、防火用水として用いられ、地下水を涵養し、屋敷林を育てた。昔と同じように再生するだけでなく、雨水利用と合わせて中水利用、災害時の利用等に役立てる。樹木もただ植えるだけでなく、都市の屋外スペースに快適な日影を生み出したり、四ツ谷用水と合わせて敷地周辺の微気候調整をしたりするなど、多面的に利用する。
- BCP のために何かを用意するのではなく、日常使いの中で BCP にもなる、ということが必要。携帯電話の充電等コストのかからない BCP 対応もある。小さいものから取り入れ、なるべく皆がまねしたくなるようなものにすべき。
- 技術は日進月歩なので、フレキシブルに対応できるようにつくるべき。
- 仙台はそこそこ寒くて日射もあり、太陽光発電やパッシブエネルギーの利用に向いている。
- 建物を一種の生物と捉えて、一日・一年の負荷の移り変わりを押さえる。インテグレートバランスを考える。自然換気やそのための吹き抜けの大きさ、パッシブ建築として押さえるべき要素の確認が必要。ダブルスキンや蓄熱・ナイトパーズが抜けている。
- 地産地消として、仙台市を中心とした各地の木や紙、工芸品等の特産品を建物に使い、循環を体験できるコーナーをつくってはどうか。
- 街の活性化を考えると、モビリティ、人の動きの設計が必要。5 年も経つと車の乗り方や地下鉄の関係も変わる。ダテバイクやスロー・モビリティの実証実験も始まっているが、市役所がそうした移動の中継地点になるような場所としてつくる。市民と来訪者両方のアクセスを考える。